「姥捨」論

― 再起する太宰治とその問題点 ―

川崎和啓

〈序〉

「姥捨」はいわゆる「中期」に向けて始動し始めた太宰治が「満願」の次に執筆した作品である。「満願」の脱稿が昭和十三年「七月下旬頃」、「姥捨」は同「八月十三、十四日頃」と推定され、[1]「姥捨」脱稿の約一ケ月後に太宰は「思ひをあらたにする覚悟」（「東京八景」）で御坂峠に出発し、「火の鳥」で自己の再起の可能性を探ることになる。「姥捨」の内容にはこのような生活転換を背景にした太宰治の強い想いが反映されている。「満願」で「中期」のいわゆる〈明るさ〉を髣髴とさせる「前期」とは別人のような作品を執筆した後、太宰治がこの作品に懸けたのは、「思ひ」も「あらたに」人生の再スタートを切る己が姿を描くという強い想いであったように思える。初代との心中事件後一年半近くを経て太宰が企図したのは、心中事件否定論者が誤解したように事件を私小説風にそのまま再現することではなく、嘉七という造型人物に自身の心情を仮託することによって、苦しみぬいた「前期」と訣別しそこから再起する自己を象徴的に語ることであった。「死の代わりに生を志向し始めた太宰の姿」、[2]「〈死〉を求める意識が〈生〉きる意志へと変化する過程を確認できる作品」[3]という指摘も、嘉七を嘉七に託された太宰治の象徴化された姿と考えてはじめて成立するように思われる。

太宰治が構想したかず枝の〈姥捨て〉による嘉七の再起の物語を太宰治の再起の物語と読めば、それは、いわゆる前期から中期へと人生の舵を大きく切って行こうとする太宰治の姿を暗示しているという意味で、太宰治の大きなターニングポイントになるはずの作品でもあった。しかし、その生の転換が必ずしも彼の意図通りに展開していかなかったことは、中期の多くの作品が証明している。一見すると多彩な手法を駆使して豊饒な作品群を生み出したかに見える太宰治の中期が、その根底で、「HUMAN LOST」で露呈した前

期の課題を未解決のままに引きずり続けていたことは明らかであって、それは、彼の前期と中期がそれほど截然と区分できないことを示してもいる。ここでは、「姥捨」が嘉七を借りた太宰治の過去への訣別と未来へ向けた再起の物語であることを確認しながら、そこにどのような問題がひそんでいるかを考えてみたい。

〈一〉

「死の代わりに生を志向し始めた太宰」という観点から言えば、この再起の物語は〈死と再生〉の物語でもある。太宰治の〈死と再生〉の物語といえば「魚服記」が想起されるが、「魚服記」が、主人公スワが滝壺に身をおどらして実際に死に、そののち大蛇に生まれ変わるという変身譚であるのに比して、「姥捨」では、主人公嘉七は実際に死ぬことはなく、いわば理念としての死を死に、理念としての再生を遂げている点にこの作品の独自性が存している。嘉七はどのように死に、どのように再生したかが当面の課題である。

嘉七の〈死〉はまず、妻かず枝との〈心中行〉として設定される。発端は、妻の「いいの。あたしは、きちんと始末いたします」という言葉に、夫も「ふつと死にたくな」り、「死なうか。一緒に死なう。神さまだつてゆるして呉れる」と応じたところにあった。「あやまつた人を愛撫した妻と、妻をそのやうな行為にまで追ひやるほど、それほど日常の生活を荒廃させてしまつた夫」が、「身の結末を死ぬことに依つてつけよう」としたのである。事実、二人が「厳粛に」死の準備を整え、死出の旅路に出るあたりまでは、作者の意識も、生活に敗れた不幸な夫婦の〈心中行〉として作品をまとめていこうとしているように見える。しかし、旅費の足しにするつもりで質屋に入ったかず枝が嘉七の前に「ほとんどころげるやうに駆け寄つて来」たあたりから、少しく様子が怪しくなっていく。かず枝は次のように描写される。

「成功よ。大成功。」とはしやいでゐた。「十五円も貸しやがつた。ばかねえ。」

ここは死に臨むかず枝の言動が具体的に描写される最初の場面なのだが、〈死〉とは無縁な女の健康な生活意識だけが前面に押し出されている。それを見た嘉七は、「この女は死なぬ。死なせては、いけないひとだ。おれみたいに生活に圧し潰されてゐない」「死ぬことを企てたといふだけで、この人の世間への申しわけが立つ筈だ」と思い、「おれだけ、ひとり死なう」と決意する。つまり、当初予定されていた「一緒に死なう」という想いが、かず枝の〈はしゃぎ〉を見た瞬間、嘉七の中で「おれだけ、ひとり死なう」という想いに変わり、二人の〈心中行〉は嘉七単独の〈自殺行〉に変わるのである。しかも、それは嘉七の独断であって、かず枝は何の相談にもあ

づかっていない。ここから作品は、形の上では〈心中行〉でありながら実質は嘉七の〈自殺行〉というように奇妙に変質していくことになる。

作者は嘉七の眼をとおしてかず枝を次のように描いていく。

・かず枝は、ひくく笑つた。嘉七の不器用な冗談に笑つたのではなく、映画のつまらぬギヤグに笑ひ興じてゐたのだ。／　このひとは、映画を見てゐて幸福になれるつつましい、いい女だ。このひとを、ころしてはいけない。

・「ね、あたし、こんな恰好をして、をばさん変に思はないかしら。」（略）。「それも、そうね。」けろつとしてゐた。

・「あたしに叩かせて。あたしが、をばさんを起すのよ。」手柄を争ふ子供に似てゐた。

・嘉七のはうに眼もくれず、ひとりで異様にはしやいでゐた。

ことさらに傍線を付すまでもないが、このように描かれた女をこれから〈心中〉に向かう女とはとうてい思えまい。嘉七の眼に映るかず枝は「おれみたいに生活に圧し潰されてゐない」健康な女であり、「生活する力」もあるおよそ〈心中〉とは縁のない女なのである。しかし、かず枝はいざ出発の段になると「ふつとこはばつた顔」になったり、「ふたりきりになると急に真面目に」なったりもしている。だが、太宰治はこれらの顔の背後にあるはずの、女の不安や思いつめた覚悟、この世への未練や惜別、寂寥の情などはいっさい嘉七に語らせようとしない。作品を、死にゆく女にまつわる哀情で切なく彩ることもなければ、「妻をそのやうな行為にまで追ひやるほど、それほど日常の生活を荒廃させてしまつた夫」の生活実態や、それが女を精神的に追いつめていく過程を克明に描くこともしなかった。かず枝はただ、「生活に圧し潰されてゐない」、「映画を見てゐて幸福になれるつつましい、いい女」であり、その意味からのみ、決して「死なせては、いけないひと」というにすぎない。すでに見たように、かず枝に〈死〉を決意させるきっかけとなったのは彼女の〈不義〉である。冒頭の、「いいの。あたしは、きちんと始末いたします。はじめから覚悟してゐたことなのです」という言葉を信じるかぎり、彼女は自らの〈不義〉が発覚すればそれは命を裁つとき、という〈覚悟〉を最初から持っていたことになる。しかし、かりに「はじめから」という語が単なる修辞にすぎず、〈死〉の覚悟が〈不義〉が発覚した時点だったとしても、特段の不都合はない。大切なことは、かず枝が〈死〉によって〈不義の始末〉をつけるという伝統的な日本社会の倫理にしたがって思考し、発想していることであって、その倫理が読者に受容される限り、読者はかず枝には死ぬべき確かな理由があったことを信じるのである。しかし、太宰治は、かず枝を二人の〈心中〉の輪の中から簡単に排除する。嘉七のひとり

よがりな「このひとを、ころしてはいけない」というテーゼによって。これは第三章でもふれるように、太宰治の描写の関心が嘉七の内面にだけ向けられていて、かず枝の内面についてはほとんど何の関心ももっていないという、太宰治の内的事実に照応しているように思える。そうであればこそ、日常生活の「荒廃」の中から〈不義〉に到るまでのかず枝の〈寂寥〉や、〈死〉の決意に到るまでに彼女の内面を支配していたはずの葛藤や〈劇〉を描こうとする契機はついに彼を訪れることはなく、その必然の結果として、かず枝はこの〈心中行〉の〈劇〉の添え物として脇に置かれ、〈劇〉はもっぱら嘉七に限定されたものになってしまう。物語の発端において、〈不義〉の女という意味でこの〈心中行〉の主人公であったはずのかず枝があっさりと端役にまわされ、物語が嘉七単独の〈自殺行〉の趣を強め出したとき、この作品は必然的に嘉七の観念的な〈死と再生〉のドラマに変貌していくのである。

〈二〉

では、嘉七が死なねばならぬ理由とは何だったのだろう。〈不義〉を犯したのは妻であって嘉七ではない。たとえ生活を「荒廃」させたのが嘉七の責任であったとしても、それは〈死〉を求められるほどの罪ではない。また、嘉七は妻に背かれた不面目な男として死を決意したわけでもない。彼は、妻の〈不義〉を知ったときの苦い想いを次のように述べる。

こんどのことは？　ああ、いけない、いけない。おれは、笑つてすませぬのだ。だめなのだ。あのことだけは、おれは平気で居られぬ。（略）。　／倫理は、おれはこらへることができる。感覚が、たまらぬのだ。とてもがまんができぬのだ。

これは、妻の〈不義〉を知ったときの嘉七のたまらない不快や憤怒の説明にはなりえても、彼が死を決意する理由にはならない。理由としてはあくまでも前述した、かず枝が不義の始末のために〈死〉を口にしたとき、「嘉七も、ふつと死にたくなつた」という一言があるだけである。しかし、はたして人はこんな薄弱な理由で死ねるのだろうか。彼にはかず枝のような死への明確な意思と覚悟があるわけではなく、あくまでも気分として醸成された〈死〉に対する情緒的親近感によって自殺志願したにすぎないのである。その分、嘉七の腰はなかなか定まらない。彼は映画に興じるかず枝に「死ぬの、よさないか？」と言っては、「ええ、どうぞ。」「あたし、ひとりで死ぬつもりなんですから。」と撥ねつけられ、宿に着いて酒を呑むうちに「おい、もう一晩のばさないか？」と提案しては、「どうでも、いいけど。でも、お金たりなくなるかもしれないわよ」と、みじめな現実を突きつけられて自分の「みれん」に恥じいる仕儀に立ち到

る。つまり、妻の〈不義〉を動機の視座に置くかぎり、嘉七には確かな死の理由は見つからないのである。作品では二人が列車に乗り込んだあと嘉七によって別の理由が示される。

おれは、おれ自身の苦しみに負けて死ぬのだ。なにも、おまへのために死ぬわけぢやない。私にも、いけないところが、たくさんあつたのだ。（略）。私は、なんとかして、あたりまへのひとの生活をしたくて、どんなに、いままで努めて来たか、おまへにも、それは、少しわかつてゐないか。（略）。私が弱いのではなくて、くるしみが、重すぎるのだ。

この直前まで嘉七はかず枝と「相手の、あの男」のことを考えていた。しかし、「能弁」になった嘉七が、自分が死ぬのは「自身の苦しみに負け」たためであり、「くるしみが、重すぎ」たためだと語り始めると、作品は自ずとかず枝の〈不義〉の物語から嘉七の〈苦しみ〉の物語に変わっていく。読者はわれ知らず太宰治の術中にはまり、嘉七の語りに引き込まれて彼の〈苦しみ〉を追いかけ始めるのである。

〈苦しみ〉を語る嘉七の話には大きな特徴が二つある。ひとつは、嘉七の語る内容があまりにも思念的、主観的で具体的な実質が感じられないことである。嘉七によれば、彼の〈苦しみ〉は、「なんとかして、あたりまへのひとの生活」がしたくて懸命に努めるところから生じているが、その〈苦しみ〉は重すぎ、しかも、それをかず枝はもちろん、彼女より「もつともつと学問」がある「古い友だち」も理解してくれなかったということになる。しかし、「あたりまへのひとの生活」とは何か、それがしたくて懸命に努めるところから生じる〈苦しみ〉とはどのような〈苦しみ〉なのか何ら具体的に語られていないため、嘉七の熱い口調とはうらはらに彼の〈苦しみ〉の実質がよく伝わってこないのである。もうひとつの特徴は、嘉七はかず枝に向って語っているように見えて、実はかず枝はほとんど嘉七の話に耳を傾けていないこと、つまり、語りが嘉七の〈独白〉になっていることである。かず枝は何度か嘉七の言葉を遮ろうとしているからまったくの〈独白〉であったわけではない。しかしその遮り方は、あたかも酔っぱらいの戯言を他の乗客の手前たしなめる、という気味のものであって、とても嘉七の言葉に真剣に向き合っているようには見えない。〈心中〉に向かっているはずのふたりに〈会話〉がなく、嘉七の〈独白〉で物語が進行するのは〈心中行〉が嘉七単独の〈自殺行〉に変質した当然の成り行きではある。しかし、この〈独白〉にうかがえる死に行くかず枝の内面に対する嘉七の無関心ぶりは注目に価する。そこには、〈死〉を目前にしてさえ本質的には初代という〈他者〉にほとんど関心を示さない太宰治の特異な人格が反映されているように思えるからだ。これについては第三

章でもう一度ふれることにして、ここでは嘉七の〈苦しみ〉の内実をもう少し追っていきたい。

かず枝が嘉七をまともに相手にせず、「だまつて雑誌を読みはじめ」ると、嘉七はついに「真暗い窓にむかつて独りごとのやうに語りつづけ」る（傍点は論者）しかなくなる。「独りごと」になると嘉七の〈独白〉はさらに熱を帯びる。彼によれば、人は〈嘘つき、なまけもの、自惚れや、女たらし〉などのおそろしい「名前」をたくさん投げつけたが、彼は「一ことの弁解もしなかつた」。彼には確固たる信念があったからである。

私には、私としての信念があつたのだ。けれども、それは、口に出して言つちやいけないことだ。それでは、なんにもならなくなるのだ。私は、やつぱり歴史的使命といふことを考へる。自分ひとりの幸福だけでは、生きていけない。私は、歴史的に、悪役を買はうと思つた。ユダの悪が強ければ強いほど、キリストのやさしさの光が増す。私は自身を滅亡する人種だと思つてゐた。私の世界観がさう教へたのだ。強烈なアンチテエゼを試みた。滅亡するものの悪をエムフアサイズしてみせればみせるほど、次に生れる健康の光のばねも、それだけ強くはねかへつて来る、それを信じてゐたのだ。（略）。反立法としての私の役割が、次に生れる明朗に少しでも役立てば、それで私は、死んでもいいと思つてゐた。

唯物史観によれば地主階級は滅亡の民であり、滅亡するものの悪を強調すればするだけそれへの反発が強まり、革命は成功する。滅亡の民という悪役に徹することで革命に寄与することが自分に与えられた歴史的使命であり、その使命を果たすことが次代の「明朗」を生み出すのに役立つならば、自分は死すとも悔いはない、というのが共産主義運動にのめりこんでいった時の太宰治の基本理念である。その理念に、のちになって聖書から学んだ「ユダの悪」「キリストのやさしさ」という語彙を散りばめ、「汝を愛するが如く、汝の隣人を愛せよ」というキリストの博愛主義を、「自分ひとりの幸福だけでは、生きていけない」という「歴史的使命」を帯びた哲学的理念に置き換えたとき、滅亡の民として生きそして死ぬという「信念」が太宰治の中に出来上がったと言ってよい。どんな悪名を投げつけられようと、「あたりまへのひとの生活」をしたいと願い、苦しんでいた太宰治は、一方でこのような信念で自己を支えていたと、嘉七に語らせるのである。しかし、「滅亡するものの悪をエムフアサイズしてみせ」ることで「次に生れる明朗に少しでも役立」つという倒錯した理念や信念が、現実の人間社会で理解を得られるとは考えにくい。太宰も嘉七に、「誰も、笑つて、ほんたうにしないかも知れないが、実際それは、さう思つてゐたものだ。私は、そんな馬鹿なのだ。私は、間違つてゐたかも知れない」と言わせざるをえ

なかった。〈苦しみ〉の底にあった〈信念〉すら〈間違っていた〉〈馬鹿だった〉と総括したとき、嘉七には苦い覚醒が訪れ、同時に、太宰治の前期も終わることになるのだが、嘉七の「窓」に向って行われる〈独白〉もまた、「窓は答へる筈はなかつた」というひと言で寂しく終わることになる。しかし、〈苦しみ〉の底にあった〈信念〉は披瀝されても、どのような「苦しみ」にどのように負けて〈死〉を考えるに到ったかという具体的な記述はどこにもない。死の理由も、そこに到る嘉七の内面を語る〈劇〉も最後まで示されず、嘉七の思弁的な〈独白〉に終始するのである。

嘉七の〈死〉の決意は突然やってくる。彼はかず枝とのやりとりの中で次のような想いにとらわれる。

なぜ、おれは嫉妬しないのだらう。やはり、おれは、自惚れやなのであらうか。おれをきらふ筈がない。それを信じてゐるのだらうか。怒りさへない。れいのそのひとが、あまり弱すぎるせゐであらうか。おれのこんな、ものの感じかたをこそ、倨傲といふのではなからうか。そんなら、おれの考へかたは、みなだめだ。おれの、これまでの生きかたは、みなだめだ。むりもないことだ、なぞと理解せず、なぜ単純に憎むことができないのか。そんな嫉妬こそ、つつましく、美しいぢやないか。重ねて四つ、といふ憤怒こそ、高く素直なものではないか。細君にそむかれて、その打撃のためにのみ死んでゆく姿こそ、清純の悲しみではないか。けれども、おれは、なんだ。みれんだの、いい子だの、ほとけづらだの、道徳だの、借銭だの、責任だの、お世話になつただの、アンチテエゼだの、歴史的義務だの、肉親だの、ああいけない。

嘉七は、棍棒ふりまはして、自分の頭をぐしやと叩きつぶしたく思ふのだ。

頭を叩きつぶしたく思った嘉七は、このあとすぐ、「決行、決行」「私はもう、かなはん」と叫び、「なにも考へたくなかつた。はやく死にたかつた」と、初めて明確な死の衝動にとりつかれたことを露わにする。ここでもまた妻の〈不義〉に対する言及がなされるが、今度は、「笑つてすませぬのだ」「平気で居られぬ」「とてもがまんができぬのだ」という、妻の〈不義〉を知ったときの衝撃や憤怒の述懐が目的ではない。衝撃と憤怒を感じながら、その感情のままに行動できない自身の「ものの感じかた」「考へ方」「生き方」に絶望しているのだ。この直前の場面で、嘉七はかず枝に「理くつばかり言つてゐるのね。だから、きらはれるのよ」と言われ、「ああ、さうか。おまへは、おれを、きらひだつたのだね。しつれいしたよ」と、「酔漢みたいな口調」で応じている。しかし、嘉七はどんなにやくざな口調で居直ろうとも、実はこのとき、〈理屈ばかり言ってるから嫌われる〉というかず枝の言葉の中に、単純な〈憎しみ・嫉妬・

憤怒〉に生きることができず、あれこれと「理屈」ばかりをこねあげて姿勢のはっきりしない自分の〈ものの感じかた・考へ方・生き方〉に対する痛烈な批判が含まれていることに気づくべきだったのである。しかし、嘉七はかず枝に感情的な反発を示しただけで、逆にかず枝の言う「理屈」のなかにまたもや入り込んでゆき、あげくの果てにその「理屈」の出口のなさに絶望的な嫌悪を感じ、〈決行、決行。もう、かなはん。はやく死にたい〉と、初めて強い自殺志願を表白することになる。

ここで注目されるのは、嘉七の「苦しみ」が「前期」太宰治に起きた、非合法活動への参加と脱落、芸者初代との結婚と義絶、女給シメ子との心中未遂と自殺幇助罪、東京帝国大学の落第と自殺未遂、パビナール中毒とそれにまつわる多額の借銭、精神病院入院、などの大事件に起因していないということである。唯一、入院中の初代の〈不義〉が素材化されているが、それが嘉七の直接の〈死〉の理由になりえていないことはすでに見たとおりである。これはこの作品を前期太宰治の清算の記として見るとき、きわめて示唆的である。太宰治は、特定の顕著な出来事を嘉七の〈苦しみ〉や〈死〉の直接的要因とせずに、太宰固有の〈ものの感じかた・考へ方・生き方〉を嘉七の〈死〉の直接的な要因に仕立ててしまっているからだ。個々の事実というよりは、それに関わる〈思考の特異性〉、〈感じ方の特異性〉、〈生き方の特異性〉が嘉七を苦しめているのである。嘉七は、何とか「あたりまへのひとの生活」をしたい、何とか当たり前の〈ものの感じかた・考へ方〉に基づく〈あたりまえの生活〉をしたいと思っているのに、人はそれを苦しみの「ポオズだ、身振りだ」としか見ず、彼の〈苦しみ〉をまったく理解しようとはしなかった。それが、嘉七に仮託された太宰治の〈苦しみ〉の根幹をなす想いだった。[4]

このことは、太宰治が〈他者〉と自己との間に日常的に強い齟齬やギャップを感じていたことを雄弁に物語っている。太宰治を本当に苦しめたのは、ときおり勃発する特定の大きな出来事やその積み重ねではなかった。むしろそれらの出来事もふくめて日常生活全般で感じていた、自他の感覚のずれや思考の齟齬に起因する対人関係の〈きしみ〉と〈不安〉だったと思われる。これはたぶん、「人間失格」の中で、〈自分には人間の営みといふものが未だに何もわかつてゐない〉〈自分の幸福の観念と世のすべての人たちの幸福の観念とがまるで食ひちがつてゐるやうな不安〉〈自分ひとり全く変つてゐるやうな不安と恐怖〉などと表現された葉蔵の不安と同質のものであって、その葉蔵の不安がすでにこの時点で嘉七の不安や〈苦しみ〉として吐露されているのである。そうだとすれば、その〈苦しみ〉が日常的に手をかえ品をかえて出現する以上、また太宰がそのずれや齟齬の生じる構造的な原因をつかめないかぎり、自分の〈不安〉や〈苦しみ〉を〈劇〉として克明に描くのはきわめて困難

だったに違いない。彼は生活の場面ごとの〈苦しみ〉を彼の〈皮膚感覚〉で受け止め続け、それを彼の〈皮膚感覚〉が命じるように描くしかなかったと思われる。たとえば、「HUMAN LOST」の中の「この五、六年、きみたち千人、私は、ひとり」という表現はその典型である。「この五、六年、きみたち千人」が「私、ひとり」を束になって攻撃し、苦しめたという事実を太宰治の実生活の中から具体的に捜し出すのはきわめて困難なことに違いない。しかし、たとえ誇張があったとしても太宰治の〈皮膚感覚〉はその〈苦しみ〉を間違いなく感じていたと思われる。そしてそれは嘉七の自殺志願に見るとおり、〈死〉を決意させるほど強い〈感覚〉で彼を苦しめていた。ただ、「HUMAN LOST」と「姥捨」の視点には違いがある。それは、自他の感覚のずれや齟齬に起因する非難のベクトルを「HUMAN LOST」では「きみたち千人」という漠とした〈他者〉に向け、「姥捨」においては「人間失格」同様、自分自身の〈ものの感じかた・考へ方・生き方〉に向けているという点である。しかし、人間関係の〈きしみ〉に苦しんでいるという点では両者はまったく共通している。

〈三〉

ここまで、二人の〈心中行〉が嘉七の〈自殺行〉になっていく様を見ながら、嘉七の〈苦しみ〉とその特異性を見てきた。物語ではこのあと、嘉七によって嘉七だけが死ぬよう周到に準備されるが、まず嘉七が眠りから覚め、かず枝も意識を取り戻して二人の〈心中〉も嘉七の〈自殺〉もあっけなく失敗に終わる。失敗したあとの嘉七の言動は二点において不可解である。ひとつは、「棍棒ふりまはして、自分の頭をぐしやと叩きつぶしたく思ふ」くらい「はやく死にたかつた」にしては、目覚めたあとの〈死〉に対する執着が弱すぎること。もうひとつは、かず枝を棄てる決意があまりにも唐突にやってくることである。一点目について嘉七は次のように語る。

> 寒い。眼をあいた。（略）。ここは？――はつと気付いた。／おれは生き残つた。（略）。
> おれは、生きた。死ねなかつたのだ。これは、厳粛の事実だ。このうへは、かず枝を死なせてはならない。

自分が生き残った以上、「かず枝を死なせてはならない」と考えるのは今までの流れからみて当然である。しかし、あれほど強い自殺願望を抱きながら、「死ねなかつた」と分かったとたん、どうしてそれを「厳粛の事実」と受け止め、心のベクトルをこうも簡単に〈死〉から〈生〉へ変換できるのか。なぜ再度〈死〉を試みたりしないのか。嘉七はそんな素振りすら見せない。

嘉七の語りに欠落しているその理由は二通りの推測ができる。ひとつは、「死ぬことを企てたといふだけで、このひとの世間への申

しわけが立つ筈だ」という嘉七の言葉が、自殺に関する太宰治の考え方を反映しているのではないかという推測である。太宰には、「自殺を処世術みたいな打算的なものとして考へてゐた」（「葉」）という言葉があるが、初期作品でも主人公に「自殺をもつと打算的なものとして考へて居た」（「彼等とそのいとしき母」）と言わせており、自殺を「打算」とする観念が彼には早い段階からあったことがうかがえる。特に「葉」脱稿の約三年前には彼は現に鎌倉で田辺あつみと心中事件を起こし初代との結婚にこぎつけた経験をもっており、そんなことと考え合わせると、この言葉は、昭和十年、十二年と窮地に陥るたびに死を試みては世間（実家）の赦しを得、世間（実家）と和合してきた太宰治に固有の観念であり、彼の秘かな人生術だったのではないかと思わせる。嘉七の〈死を企てることで世間への申し訳を立てる〉という発想は、まさに自殺を「処世術」「打算」とする太宰治独特の考え方であり、それに続く「この人はゆるされるだらう」という期待も世間にもたれかかった太宰の「打算」のひとつと言えるだろう。だとすれば〈死を企てることでゆるされるだろう〉という期待は、かず枝に限らず彼女とともに死を企てた嘉七自身に向けられてもいいはずである。生から死への豹変する嘉七の描写の背後には、太宰治の〈死を企てることでゆるされる〉という意識がどこかで働いていたのではないか、というのがひとつめの推測である。

もうひとつは、精神科医・高橋詳友の示唆に富む指摘[5]である。高橋は太宰をうつ病、パーソナリティ障害など「複数のこころの病に罹患していた」「自殺の危険の高い」人と認定した上で、「道化の華」の、葉蔵が友人たちと病室でトランプにうち興じている場面に言及しながら、自殺未遂者について次のように指摘する。「自殺を図った直後の人」は、「自殺の意図を否定したり、まるで他人事のように自殺未遂について語ったり、それどころか、どこか妙に昂揚した気分でいることさえ、実際には珍しくない」、「自殺未遂自体が一種のカタルシスになって、それまで続いていた極度の抑うつや不安感が一時的に晴れてしまうことは臨床的にはよく出会う」、あのトランプの場面は「自殺を図った直後」の「妙に昂揚した気分」によってもたらされたものであって、「未遂直後の人の感情をこれほど克明に描いている作家は他にはいない」というのである。嘉七に「昂揚した気分」が訪れているかどうかの判断は微妙である。かず枝を蘇生させるために「たくさんの仕事」をする嘉七にはそのような「気分」が作用しているのかもしれないが、葉蔵のような〈はしゃぎ〉は彼にはないからだ。しかし、「臨床」的事実にもとづく高橋の「カタルシス」説は、〈死〉から〈生〉へ豹変するという嘉七の不可解な心的現象の説明としてきわめて示唆的である。高橋説に依るとすれば、太宰治は初代との心中未遂後に自身が実際に感じていたであろう「不安感が一時的に晴れてしま」った「未遂直後」の「感情」

に忠実に従って、嘉七を〈生〉へ向かわせたことになりはしないか。嘉七の心理的蘇りが「処世術」と「カタルシス」のいずれに依るのか、あるいはこの二つがどこかで微妙に融合しているのか、それはよく分からない。しかし、もしそれが今まで述べた推測にいささかでも関わっているとしたら、嘉七の心理的蘇りは太宰治の〈感じ方・考え方〉の〈特異性〉に基づき、それを反映していると言っていいだろう。

＊

嘉七の〈生〉志向が唐突だったように、〈姥捨て〉も突然やって来る。〈姥捨て〉が嘉七の〈生〉志向と密接に表裏しているからだ。「いやだ、もういやだ。わかれよう」と「はっきり決心がついた」嘉七は、続けて「生きてゆくには、それよりほかに仕方がない」と考える。しかし、髪に「杉の葉」が「一ぱいついて」まるで「山姥」のようになったかず枝を棄てることがなぜ彼の生きる道につながるのか。そもそも、ここのかず枝は嘉七にとってどのような存在なのか。たぶん「山姥」のようになったかず枝は、嘉七にとって単に死にそこなった女の凄惨な修羅を体現しているのではない。それを超えて今までの嘉七の夫婦生活総体の、そして生活総体の修羅を象徴している。嘉七にとって〈山姥のようなかず枝〉を棄てることは自分の過去の一切の修羅を整理しそこから訣別することを意味していたと考えられるからである。嘉七は〈死の企図で申し訳を立てる〉という厳粛な〈死〉の儀式を演じることによって理念的に死に、かず枝の〈姥捨て〉によって過去の一切と訣別して理念としての〈再生〉の道を歩むのである。そのとき嘉七は次のように思う。

おれは、この女を愛してゐる。どうしていいか、わからないほど愛してゐる。（略）。けれども、もう、いい。おれは、愛しながら遠ざかり得る。何かしら強さを得た。生きて行くためには、愛をさへ犠牲にしなければならぬ。なんだ、あたりまへのことぢやないか。世間の人は、みんなさうして生きてゐる。あたりまへに生きるのだ。

「あたりまへのひとの生活」が出来ないと思い悩み、「単純に憎む」強さがないと自身に愛想をつかして「棍棒ふりまはして、自分の頭をぐしやと叩きつぶしたく思」い、死を「決行」した嘉七は、ここに到ってはじめて彼に欠けていた「強さ」と「あたりまへ」の感覚を得る。この二つを獲得したと信じたとき、彼はそれまでの〈不安〉や〈苦しみ〉から脱却し、「あたりまへに生きる」決意のもと〈再生〉の道へ歩を進められると信じた。かず枝の遺棄は文字通り嘉七の再生をかけた究極の決断だったのである。〈姥捨て〉成就後の描写は淡白だが、確かな再起の糸口をつかんだ嘉七にとってそれらはもはや深い関心の対象ではなくなっている。むしろここには、〈強

さ〉と〈あたりまへの感覚〉を獲得したと信じた嘉七の、一切の迷いから解放された精神の安定と平静が表象されていると見るべきだろう。彼は叔父の「かず枝も、かあいさうだね」という言葉に「心弱く」困ることはあっても、それによって心のバランスを大きく崩して苦しむことはもはやない。ここに表象されているのは「姥捨」執筆時に太宰治自身が自己の〈再起〉と〈再生〉に向けて期待し夢想していたであろう、〈強さ〉と〈あたりまへの感覚〉を獲得して再起した後の、安定した実生活の象徴化された像であろう。

ただ、嘉七の〈生〉の意思表明は、〈死〉に赴くときの語りに二つの点で酷似している。ここでも、嘉七の語る内容があまりにも主観的で具体的な実質が感じられないこと、もうひとつは、語りがかず枝を捨象した嘉七の〈独白〉になっていることの二つである。まず嘉七はかず枝を棄てる理由を、「おれは、まだまだ子供だ。子供が、なんでこんな苦労をしなければならぬのか」「この女は、おれには重すぎる」「この女は、だめだ。おれにだけ、無際限にたよつてゐる」と言う。しかし、この〈独白〉にはほとんど具体的な説明がなく、読者には、中年男の嘉七がなぜ「子供」なのか、なぜ彼が「しくしく嗚咽」するのか、かず枝を棄てなければならないほどの「苦労」とはどんな「苦労」なのか、かず枝が「重すぎる」とはどういうことなのか、詳しいことはいっさい知らされない。嘉七にはこういう想いに相当する実感があるのだろうが、その実感が具体的な内実をともなって客観的に対象化され言語化されているとはとても言い難い。それに、「重すぎる」「無際限にたよつてゐる」という非難は、心中の一因を成したはずの「日常生活を荒廃させてしまった夫」という冒頭の述懐とも整合性がとれない。夫婦関係崩壊の因は双方にあったはずなのに、これでは嘉七だけが「いい子」にすぎる。それに、「この女は、だめだ」という評価は、「このひとは（略）つつましい、いい女だ。このひとを、ころしてはいけない」という評価からもかけ離れていて、嘉七のかず枝評はあまりにもその場の状況に左右されすぎている。作品のこのような欠陥にもかかわらず、もし読者が嘉七の〈独白〉に引きずり込まれることがあるとすれば、それは嘉七の〈独白〉に込められた太宰治の心情の切実さによると言うしかない。

二つ目の、かず枝をはずした嘉七の〈独白〉も一方的である。二人の〈心中行〉を嘉七単独の〈自殺行〉にしたのが嘉七の独断だったように、かず枝の〈姥捨て〉も嘉七の一方的な〈独白〉によって語られ、嘉七はかず枝を棄てる自分の内面は語っても、棄てられるかず枝の胸中については一言もふれようとしない。死におもむくかず枝の内面に立ち入り、彼女の内面の葛藤やドラマを語ることのなかった嘉七は、ここでも棄てられるかず枝の悲哀に焦点を合わせ、彼女の内面や将来に想いを馳せることも、それをかず枝に語らせることもまったくないのである。このようなかず枝の描写に対する無

関心はどこから来るのだろうか。

太宰治は戦後になって、「ぼくはね、今までひとの事を書けなかつたんですよ。この頃すこうしね、他人を書けるやうになつたんですよ」と語っている。[6] これは死におもむくときにも、棄てられるときにも、ひとりの女として当然抱いたに違いないかず枝という〈他者〉の葛藤や悲哀を描かなかった太宰治を考えるとき、きわめて示唆的な言葉である。彼はかず枝の内面を描かなかったのではなく、描けなかったと考えられるからだ。彼はなぜかず枝を描けなかったのか。理由はいくつか考えられる。ひとつは、葉蔵の〈自分には人間の営みというものが何もわかっていない〉〈自分の観念と世人の観念はまるで違っている〉〈世の中で自分ひとりが変わっている〉という不安にうかがえる、太宰治の〈他者理解〉能力の不足ないしは欠如である。「人間の営み」が分からないとは〈他者〉が分からないというのと同義であって、〈他者〉が分からなくてかず枝という〈他者〉が描けようはずがない。ふたつ目は、太宰治の性格である。今まで見てきた嘉七の主観の強さは太宰治の主観の強さの反映と考えられるが、美知子夫人は太宰を「主観のかたまりのような人」[7]だったと言う。また、来客の多さが仕事の差し障りにならないかと案ずる夫人に、太宰が「人の話なんか聞いていないよ」と答えたという逸話[7]もある。太宰治は昭和十一年に「挨拶」という随筆の中で次のように書いている。

柿右衛門が、竈のまへにしやがんで、垣根のそとの道をとほるお百姓と朝の挨拶を交してゐる。お百姓の思ふには、「柿右衛門さんの挨拶は、ていねいで、よろしい。」柿右衛門は、お百姓のとほつたことすら覚えてゐない。ただ、「よい品ができあがるやうに。」

柿右衛門を素材にしたこの一文は、太宰治の意識がもっぱら自分の文学にだけ向けられていて外部世界への関心がほとんどなかったことを示唆している。この一文や嘉七の語り口、結婚後の逸話に示された〈他者〉への無関心はたぶん一連のものであって、かず枝に対する無関心は単にかず枝のみに向けられたものではなく、太宰治の性格にひそむ彼固有の資質の発露であったと思われる。そして、彼の主観の強さと〈他者〉への無関心は表裏一体のものであって、彼は主観性が強い分だけ心を外に開き他に積極的にコミットしていくことが出来なかったのである。このように考えると、太宰治が〈他者〉を描けなかったのは、「人間の営み」が分からないという彼の〈他者理解〉能力の致命的とも言える欠陥と、彼固有の主観性の強さや〈他者〉への無関心がもたらす必然の帰結だったと思われる。嘉七の自己中心的な語りや、かず枝の徹底した疎外だけでなく、「つつましい、いい女」が「この女は、だめだ」に変わる嘉七の人間評価

の気まぐれも、すべては太宰治の以上の素因に由来しているように思える。

すべての〈他者〉を、自分とは異なる独自の世界をもつ〈他者〉として認識し、そこに明確な自他の距離を設定できないかぎり、〈他者〉や〈世間〉はどこまでも太宰治にとって難解な存在であり続けるしかない。「人間失格」の葉蔵がもらす〈人間がわからない〉という不安は、〈他者〉や〈他者の世界〉、そしてそれらがもつ意味を理解できない太宰治の不幸な資質に根ざしていた。嘉七の再生・再起がいかに決然と行われようと、それが〈他者〉との関わりを排除した〈独断〉や〈独白〉にもとづくものである以上、〈他者〉や〈世間〉との軋轢の中でまたぞろかつての〈不安〉が頭をもたげ、太宰に「あたりまへの生活」を許さなくなる事態が訪れるのは自明であろう。「人間の営み」の本質を理解し、その営みの中で〈他者〉と適切な人間関係を結べない限り、中期になろうと後期が訪れようと、太宰治の人間不安は消えるはずはなかった。嘉七から葉蔵への距離はほんのわずかなのである。「姥捨」の〈再起〉にはそのような危うさが確かにひそんでいる。（了）

〈註〉

（1）『太宰治全集』（筑摩、一九九二・四）の「年譜」。

（2）渡部芳紀「姥捨」（『太宰治必携』一九八一・三、学燈社）。

（3）長原しのぶ「『姥捨』における〈死生観〉」（『解釈と鑑賞』二〇〇四・九）。

（4）後述するように、太宰治は「人間失格」の中で、葉蔵に、〈自分には人間の営みというものが何もわかっていない〉という意味のことを幾度となく述懐させるが、「前期」においても「狂言の神」で、主人公について「かれの生涯の念願は、「人らしい人になりたい」といふ事であつた」と述べるなど、「あたりまへのひとの生活」ができない苦しみやそれへの希求は太宰治の文学の大きな特徴になっている。

（5）高橋詳友「自殺学からみた太宰治」（『解釈と鑑賞』二〇〇四・九）。

（6）座談会「歓楽極まりて哀情多し」。1の全集の第十巻に拠る。座談会は一九四六年十一月に行われたようである。

（7）津島美知子『回想の太宰治』（一九八三・六、講談社文庫）。

―かわさき・かずひろ、神戸親和女子大学文学部教授―